

■ 充実した2学期に！



いよいよ2学期が始まりました。まだまだ暑い日が続き、長い夏休みが終わったばかりでペースがつかめないという人もいるのかもしれませんが、心も体も少しずつ「学校モード」に切り替えていきましょう。

2学期は気候も良く、学習にスポーツに、読書や文化的な活動に・・・と、それぞれ目標をしっかりと立てて充実した生活をしていけるようにして欲しいものです。特に3年生諸君は、進路活動を本格化させていかなければならない時期になります。「希望進路実現」に向けて、緊張感を持って取り組んでいきましょう。なお、これからは3年担任の先生方の調査書作成が立て込む時期です。必要な人は、2週間くらいの余裕を持って、BLENDで申し込みましょう。9月は総合型入試が本格的に始まる時期ですが、各大学や専門学校に送付する志願書も必ず担任の先生や進路指導担当の先生にチェックしてもらうようにしてください。締切に間に合わないということのないように早め早めに進めていくことが大切です。

■ 3年生の就職希望者へ



3年生で就職を希望する者は、いよいよ応募期間になります。基本的に9月5日(火)から9月8日(金)が企業側に提出する書類の受付期間で、9月16日(土)から採用試験が始まります。今年度は9月16日(土)から9月18日(月)までが3連休となるため、必ずしも9月16日(土)に採用試験が実施されないケースもあるかもしれませんが、しっかり準備をして臨むようにしましょう。

なお、企業側に提出する書類は、①鑑文(※挨拶文で、学校側で準備します)、②調査書(※学校側で準備します)、③履歴書の3点になります。就職を希望するみなさんは、③の履歴書をしっかり準備しておきましょう。特に「志望動機」については、よく考えて200字～250字程度でまとめるようにしましょう。趣味や特技についても、面接官が受験者の人となりを知るために質問してくる可能性がありますので、適当に何となく書くことのないように注意してください。なお、簡易書留の速達で送るようにしますので、費用として800円程度かかりますので準備するようにしてください。

自衛隊希望者に対しては、夏休み中に応募書類の作成を学校で済ませました。その他、公務員等の希望者は、申込み漏れのないように進めてください。公務員についてはどの分野にしても、かなり高い学力が求められます。最後まで諦めずに問題集に繰り返し取り組みましょう。

■ 大学・専門学校への入学試験に向けて

大学、短大、専門学校等を総合型（AO）で受験希望する生徒は、9月から本格化していきますので準備を進めていきましょう。夏休み中に登校して、「志望理由書」等を作成していた生徒もいましたが、まったく登校しないで2学期を迎えた生徒も多くいるものと思われます。今後、しばらく進路指導室に生徒が殺到することが予想されますが、「志望理由書」などは、担任や進路指導担当者に早めに確認してもらうようにしましょう。



推薦入試は「指定校制」、「公募制」など種別を問わず、基本的に11月に実施する大学、短大、専門学校が多いものと思われます。その第1回目の「推薦会議」を9月中に実施する予定です。該当者が決定したら、要項を配付します（※受験人数が確定した後に、各大学等から取り寄せるケースもあります）。総合型も含めてWEB出願の大学、短大、専門学校も増えていますが、よく確認して対応する必要があります。

最後になりますが、例年本校で最も受験者が多い東日本国際大学およびいわき短期大学については、受験料が発生しませんので注意してください。例年、注意喚起しているのですが、納入してしまう人がおり大学側に迷惑を掛けてしまっています。加えて、同大学・短大希望者は、「奨学生申請書」の提出も求められます（※「学生募集要項」に添付されています）。基本的に本校生は、少なくとも「附属高校（奨学生）」になりますが、学業特待を希望する場合には「学業（奨学生）」になりますし、スポーツ推薦の場合には「スポーツ（奨学生）」になります。よく確認して記入するようにしましょう。

■ 日本学生支援機構奨学金の予約採用について

日本学生支援機構奨学金の予約採用について、今年度3回目（※本校では2回目）の申込みは夏休み中に完了しております。6月（校内第1回目）で申込んだ人は11月末頃、7月（校内第2回目）で申込んだ人は12月末頃までには結果通知が届くものと思われます。



なお、結果通知に沿って、大学、短大、専門学校への入学手続きの際に、所定の手続きを済ませないと申し込んだことにはなりませんので、予めご承知おきください（※予約採用の申込みをしたものの、必要ないとか就職に希望が変わった場合は、所定の手続きをしなければ特に問題ないかと思われます）。

例年、マイナンバー提出書の未提出で審査が遅れるケースが見られますが、マイナンバーに関しては学校の方ではタッチできません。今年度は多くの生徒がマイナンバーを保有しているとのことでしたが、一部、保有していない人もおりましたので、日本学生支援機構から問合せがありましたら、速やかにご対応願います。不明な点がありましたら、早めに学校担当者の清水もしくは大和田にお問合せください。

■教育実習生にインタビュー

掲載するのが遅くなってしまいましたが、6月に教育実習に来ていた本校卒業生の村井皇太さん（仙台大学体育学部スポーツ情報マスメディア学科）に教育実習の最終日にインタビューした内容を掲載します。村井さんの価値観に触れてみてください。



Q：教育実習を通して感じたことは何ですか？

A：高校時代は、先生が授業をやるのは当たり前のことだと思って授業を受けていましたが、実習を通して、教員の大変さを身をもって実感しました。毎回しっかりと準備しないと1コマの授業を進められないと感じました。

Q：なぜ、教員を志望しようと思ったのですか？

A：佐藤裕喜先生の影響が大きいです。諸般の事情で、高校3年のときに選手からサポートする側に回ったのですが、そのときに佐藤先生からさまざまなことを教えていただきました。生徒に本気で向き合ってくれたことで自分の中の意識も大きく変わりました。

Q：大学の授業や諸々の活動を通して自分にとって大きかったものは何ですか？

A：新型コロナウイルスの影響で、なかなか対面での授業はなく、あまり印象に残っていることはありませんが、去年の秋から野球部の主務になり、全国大学選手権大会を経験できたことが自分にとっては最も価値のある出来事でした。準々決勝で敗れましたが、ベスト8に入ることができたのは大きなものでした。

Q：後輩の諸君に伝えたいことがあれば、一言お願いします。

A：勉強も部活動も大切ですが、何でもよいので、自分の好きなこと、自分がやりたいことに熱中してほしいと思います。また、さまざまな経験を積むことで、自分なりの「人生の価値観」を養ってほしいと思います。今の時代において、「多様性」ということがさまざまなところで言われます。私自身もその大切さを感じています。さまざまな人と出会って、さまざまな価値観に触れ、さまざまなことに対応できるようにし、自分の人生を豊かなものにしてください。

■大分県中津市を訪ねて



コロナウイルス5類に移行してから初めて迎えたこの夏は、九州に出かけてきました。中でも印象に残ったのは、大分県の中津市です。

中津市は近年、「鶏の唐揚げ」ですっかり有名になりました。いわき市内の居酒屋などでも、「中津風鶏の唐揚げ」という商品が見られ、筆者もつい注文してしまうことがあります。ただ、今回は唐揚げ屋を食べ歩くというよりも、中津の歴史や文化に浸ることが目的でした。

中津市は1万円札の肖像、福沢諭吉の出身地です。正確にいうと、福沢は大阪堂島の中津藩蔵屋敷で生まれ、父親が亡くなった後、父の出身地である中津で生活していくようになるのですが、いずれにしても、福沢諭吉にとって関わりが深い地域であることに間違いありません。JR日豊本線の中津駅に着くと、「福沢諭吉のふるさと」という幟やポスターがそこかしこに見られました。

中津駅から1kmほどのところに位置する福沢諭吉の生家と記念館を訪ねましたが、記念館はかなり見ごたえがありました。福沢諭吉は大阪の適塾で緒方洪庵に蘭学を学び、中津藩の命により江戸（東京）・築地に蘭学塾を開きますが、アメリカやヨーロッパなどを歴訪して、これからは蘭学よりも英学の振興が必要と考え、慶應義塾（現在の慶應義塾大学）を開設したそうです。慶應義塾の開設にあたっては、中津藩出身の多くの人物が関わっていたことが記念館の展示で分かりました。福沢諭吉直筆の資料も数多く展示されていましたが、文字が丁寧で細かかったのが印象深いです。『学問のすゝめ』や『西洋事情』など、有名な書物もこうして書かれていったのだなと感慨深くなりました。

展示内容で印象深かったことの一つに、福沢諭吉が「男女同権」についても早くから唱えていた人物であったということです。共に明六社の結成に携わった初代文部大臣の森有礼も「男女平等」を早くから唱え、日本人初の女子留学生・津田梅子らをアメリカで支援した一人とされます。福沢と森は思想の面で馬が合い、近代日本の進むべき道について画策していたのでしょう。

中津市に関わる歴史上の人物をもう一人。西洋の解剖書『ターヘル・アナトミア』を中心となって翻訳して『解体新書』の出版に関わった前野良沢は、中津藩の藩医でした。福沢諭吉の生家からほど近いところに中津城があり、そこで前野良沢や『解体新書』に関わる興味深い展示が見られました。それほど大量の展示ではありませんでしたが、江戸時代当時、医学の進歩のために、夢中になって人体の解剖図などを書き写したりしていたであろう、前野良沢らの姿が想像できました。本で読んだことはあるものの、資料としては初めて目にするものも多くあり、中にはハッとさせられる貴重な展示もありました。

筆者が学生の頃、ゼミ担当教授の勧めで読んだ吉村昭の小説『冬の鷹』（新潮文庫）は前野良沢が主人公で、『ターヘル・アナトミア』を精力的に翻訳する様子が描かれていたのが印象的です。おそらく、吉村昭も中津城をはじめ、この地域をいろいろ取材したうえで『冬の鷹』を書き上げたのだらうと思われる。ちなみに、吉村昭は多数の長編歴史小説を書いている作家ですが、丹念な取材で、これまでに引き込まれた作品が数多くありました。大学時代に担当教授に教えてもらわなければ、知り得なかった世界だったかもしれません。

中津市に限らず、大分県は古代から近代を問わず、歴史的な見どころが数多くあります。今回は中津市に絞って書きましたが、ぜひみなさんも1度訪ねてみてはいかがでしょうか。

文責：清水聖（進路指導主事）